

小論文 問題

次の文章を読み、後の問に答えなさい。

サッチャーの教育改革は新自由主義だと批判されたり、テストで学力を管理し競争をあおるのは市場原理に基づく新自由主義だと思われる。ところが、伝統的な教科に基づいて知識を教え込み、テストの点数で教育を管理しようというのは、新保守主義の発想である。意外なことに、新自由主義の競争原理は、人間の能力を制限しない方向に動く。繰り返していえば、新自由主義は競争を奨励したのではなく、1) 事の善悪ないしはものの良否の判断を市場の動向に委ねようとした。つまり、価値判断に関する国家の介入を排除しようとしたのである。

現在、ヨーロッパで起きている教育潮流は、学力をできるだけ広くとらえ直そうという動きであり、この無視できない変化を受けて、日本の「全国学力テスト」にさえ、自由記述式の出題が入れられたのである。

教育とは教科を教えることではない。人間の能力をきわめて狭いものととらえ、教育の仕事教科に体系づけられた決まりきった知識や技能を教え込むことだと錯覚してはならない。教育とは人間を育てることだという視点に立ち返って、そこにもう一度教科の知識や技能を置き直してみることが今一番必要なことではないか。知識や技能が、血となり肉となって人間として育っていく、というように。

教育哲学者のジョン・ホワイトは、「スタート地点はもはや教科ではない」と指摘し、学校教育を「教科基盤カリキュラム」から、「目的基盤カリキュラム」に変え、「教育の目的と幅広い中身」を保障すべきだと主張した。どれが主要教科だなどということは、人生の目的に合わせて子ども本人が決めていくことだと彼はいう。イギリス教育の反省の核心は、この点なのだ。

(出典：A17-0294『競争しても学力行き止まり イギリス教育の失敗とフィンランドの成功』福田誠治著より。一部改変した)

【問1】サッチャーとは誰のことか。君の知るところを簡潔に述べよ。

【問2】傍線1) について、文中のことばを使いながら、150字以内で説明せよ。句読点も1字として数える。

【問3】傍線2) とはどのような学びか、キャリアデザイン学に関連づけて、君の意見を400字以内で述べよ。句読点も1字として数える。

われわれは、教える視点に立ちすぎたのかもしれない。今、われわれは教育の論理を学びの視点から組み直す必要性に迫られているのではないだろうか。子どもの立場から学びと成長を確保していけば、多くの教育問題は解決するのではないだろうか。

弱冠二九歳で教育大臣になり、1994年以降の教育大改革を、足かけ六年間にわたって指揮したフィンランドのオリベッカ・ヘイノネン元教育相は、『未来への提言』(NHK-BS 2007年2月12日放送)で次のように答えた。

世の中の変化が速く、お手本がない。次世代は、大人になる力が弱まっている。しかし、人間が社会生活をするには、知識だけでなく、内省力(intuition)が必要だ。私たちが走り続けるなら、内省力が失われる。だから、これからの教育システムは、あえてペースを少し落として、一人ひとりにより深く考えさせることができなくてはならない。自分の頭で考え、自分の心で感じ他者を信じ、そして、他の人にも同様に、それぞれが自分の頭で考え、心で感じる時間を与えることが重要です。

じつくり考えるように育て一人ひとりが自律できるようにしようというのだ。フィンランドの教育など、日本人から見れば、「ゆとり」教育どころか、今でもずっとのんびりしている授業なのに、なお彼はこのように言ったのである。そして、番組の最後に、2) 「学校のためにではなく人生のために」というラテン語の格言を書き示した。